

# 引き裂かれる夫婦と親子

— 硬直した入管行政と日本人妻 —

ジャーナリスト

榎田秀樹

●かしだ・ひでき 1959年北海道生まれ。自身のホームページやブログでも、大手メディアが報じない多くの問題を追いかけている。

二〇二二年五月八日。東京・新宿で外国人を夫にもつ数人の日本人女性が集まった。初めて会う者どうしもあるが、互いが背負う共通の問題を思う存分話し合った。女性たちの夫には様々な理由で在留資格がない。「仮放免」という、「準備が整えば出身国に帰す」との前提で、「就労禁止」かつ「居住都県からの移動が制限されている」という状況に置かれている。夫に在留資格がないことで、妻や子どもが理不尽な生活を強いられている。榎田秀樹さんにレポートしてもらった。

「国際結婚でビザが出ないのは、夫が悪いことをしたんじゃないの」—— 窮状を人に話しても、そう決めつ

「就労禁止」でどうやって生きていけるのか

晴佳さんの夫のムセンブラ・サイさん（三十八歳）はコンゴ民主共和国の出身だ。

コンゴは、政権による特定民族の排除や、ダイヤモンドやコバルトなどの鉱産資源に絡んでの国内紛争で、五〇〇万人以上の国民が虐殺や飢えなどで死亡したといわれている。サイさんは、そうした状況を変えたい



仮放免の夫と日本人の妻は2ヵ月おきに入管に出頭する。写真は妻のミウさん（仮名）と夫のBさん。毎回、夫は入管から「いつ帰国するのか」と言われている

けられる。

ある妻は、それは偽装結婚だと疑われ、親から勘当された。

あるいはオーバーステイ犯罪のように書き立てるメディアが作る偏見。

日本人として、日本に住みながら、妻たちは無理解の壁の中で孤独に耐えていた。だから五月八日、同じ悩みを持つ者どうしで気持ちをかち合うことができたことに、誰もが「また会いたい」と口にした。

この会合の呼びかけ人が、一二年夏に「夫（仮放免者）の在留資格を求める日本人配偶者の会」（以下、「配偶者の会」）を立ち上げたムセンブラ晴佳さん（四十六歳）だ。

め政治活動に関わったが、身の危険を覚え、日本大使館で九十日間の観光ビザを取得し二〇〇八年に来日した。日本を選んだ理由は、日本大使館での観光ビザ発行が他国よりも早いからだ。

来日直後にサイさんは「東京出入国在留管理局」（東京都港区。以下、東京入管）に難民認定申請をした。結果が出るまでは「特定活動」という暫定的な在留資格を得た。だが、一二年三月に申請は不認定となり、同時に「特定活動」は更新されず、在留資格のない身分となったため、東京入管に三ヵ月間収容された。そして出所後に在留資格のない仮放免の身分で生きることになる。

一五年、サイさんは晴佳さんと出会う。晴佳さんは彼に在留資格がないと知っても人柄に惹かれ、一七年三月に同居、五月には双子の女兒を出産、六月に入籍した。サイさんは家事も育児も積極的に取り組んだ。

夫妻は母子手帳と結婚証明書を入管に提出した。入管は「サイ氏には帰国してもらわないといけない」とひたすら帰国を促したが、晴佳さんは「入籍もしたし、子どもも生まれた。一年くらいで夫に配偶者ビザが出るはず」と信じていた。実際、出産の翌月、入管職員